Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-09-10

国際経営におけるバウンダリー・スパニング活動

大野，陽子

(Degree)
博士（経営学）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2022-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7996号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007996

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

学位論文審査要旨

氏名　　大野　陽子

論題　　国際経営におけるバウンダリー・スパニング行動

審査　　令和３年２月

神戸大学

論文内容の要旨

本研究の目的は、多国籍企業の本社と海外子会社間のバウンダリースパニング活動を明らかにし、本社がその活動を効果的に管理する方法を探求するものである。

本社が海外子会社を管理するためには、海外子会社から本社への情報移転が重要である。それゆえ、両者間で行われる情報移転と調整を含むバウンダリースパニング活動を行う機能を担う個人であるバウンダリースパナーの行動に注目する必要がある。本研究では、この機能を組織より与えられている海外子会社の駐在員と現地社員の行動と彼ら本社に移転する情報に注目し、バウンダリーが生み出すジレンマが本社と海外子会社間のバウンダリースパニング活動に与える影響を明らかにすることにより本社による海外子会社の管理の在り方を提示するものである。

この課題を導出するため、第 2 章では、本社と海外子会社の関係、バウンダリー、バウンダリースパニング活動の議論についてレビューを行っている。

組織間における情報移転が大きく議論される理由は、情報の重要性とともに、そこに難しさがあるからである。つまり組織の違いと国の違いによるバウンダリーが情報移転を阻害するからである。これらのバウンダリーは、ジレンマを作り出し、本社と子会社間のバウンダリースパニング活動に影響を与えると考えられるが、既存のバウンダリースパニング活動研究はこの前提をおいておらず、バウンダリースパナーが置かれているジレンマが存在するコンテクストがバウンダリースパニング活動に与える影響を考えると、その前提を持って議論する必要がある。

第 3 章では、これらのバウンダリーが生み出すジレンマについて議論している。国の違いから生じるジレンマとして、現地適合と統合のジレンマと 2 重の環境の埋め込まれのジレンマを提示している。また組織の違いから生じるジレンマとして本社と所属組織の目標の不一致から生じるジレンマと本社の資源への依存と所属組織の自律から生じるジレンマを挙げている。

先行研究のレビューより本研究が導出した課題は、バウンダリースパニング活動を行う個人の行動とコンテクストの個人への影響に注目し、バウンダリーが生み出すジレンマがあることを前提として、バウンダリースパナーの行動と本社と子会社間のバウンダリースパニング活動を議論すべきであるという点である。

第 4 章では、第 5 章と第 6 章における質的調査の調査概要と分析方法について説明がな

された。第5章では、質的調査からバウンダリースパニング活動の4段階においてジレンマの影響があることを確認した。先行研究では情報量に注目していたため、情報量に影響を与える情報獲得と情報移転に議論が集中していたが、本研究では、情報選択と情報翻訳の段階でジレンマが大きくバウンダリースパナーに影響し、バウンダリースパナーの主観により情報の変容が起きることを明らかにした。

第6章でも同様に質的調査を通じて、情報選択と情報翻訳段階において、ジレンマに直面したバウンダリースパナーの行動選択が自己利益追求、自己の自律性の追求、国の制度への心理的埋め込まれの3つの理由から行われることを明らかにした。また、海外子会社のバウンダリースパナーは、組織と国の2重のバウンダリーから生じるジレンマに直面することがあり、国の制度への埋め込まれが自己利益追求よりも強くバウンダリースパナーの行動に影響を与える示唆をえた。

結論の章である第7章では、理論的貢献として、暗黙的複雑な現象と論じられているバウンダリースパニング活動を4段階に分けて分析することで、バウンダリースパニング活動へのジレンマの影響を確認したこと、ジレンマを前提に持ちこむことにより、ジレンマとバウンダリースパナーの行動の関係、それが組織のバウンダリースパニング活動に及ぼす影響を明らかにすることで個人行動と組織活動の議論を統合したこと、バウンダリースパナーの選択行動の理由を明らかにすることでその背後にある合理的な行動のメカニズムがあることを明らかにしたこと、知識移転だけで捉えられていたバウンダリースパニング活動が調整という活動を含めることで、バウンダリースパニング活動の概念を捉えなおしたことの4点を示した。

本研究の限界としては、海外子会社の任務がバウンダリースパニング活動に影響があるため、本研究の結果の一般化は慎重にする必要があること、本論文が導出した仮説を検証する必要があること、本社国籍と現地国籍の影響を排除できるものではないことの3点を挙げた。

論文審査の結果の要旨

国際経営におけるバウンダリースパナー研究では、これまで本社と現地子会社を繋ぐバウンダリースパナーは中立的な存在であるという前提のもと、研究が進められていた。しかし、実際のバウンダリースパナーは、駐在員として情報の移転役でありつつも、現地子会社をマネジメントする役割もあるなど、様々なコンテクストに埋め込まれた存在である。これを踏まえ、本研究では、埋め込まれるコンテクストとそれに伴うバウンダリースパナーが抱えるジレンマを整理した上で、バウンダリースパナーが埋め込まれたこれらコンテクストを踏まえ、そのコンテクストによって知識・情報の移転行動（バウンダリースパニング行動）が影響を受けることを既存研究の検討と調査から明らかにした。また、知識・情報の量だけでなく、質にも着目し、知識や情報を獲得・選択・翻訳・移転にそれらのコンテクストが与える影響を明らかにしている。本研究は、2つの点で既存研究に新しい視点を持ち込むことで、バウンダリースパニング行動における、情報の歪みが発生することを明らかにし、単純にインセンティブを課すだけで、有力な情報が得られるようになるわけではないことを明らかにした点が、理論的・実践的な意義と言える。丁寧なレビューと着実な調査を踏まえ、これらの点を明らかにしたことは十分に博士論文として評価できる。

一方で、文献レビューが狭い範囲にとどまっており、古典的な境界統制の議論や研究開発における知識移転の議論など、国際経営に止まらないバウンダリースパナーについての検討が不足している点、バウンダリースパナー以外の国際経営の議論が十分ではない点が指摘された。また、論文表現においてももう少し整理して論述することができたはずであるとの指摘もあった。しかしながらいずれの指摘についても、本論文の本質的な価値を減ずるものではないと判断した。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

令和3年3月6日

審査委員　主査　教　授　鈴木　竜太
教　授　上林　憲雄
准教授　服部　泰宏